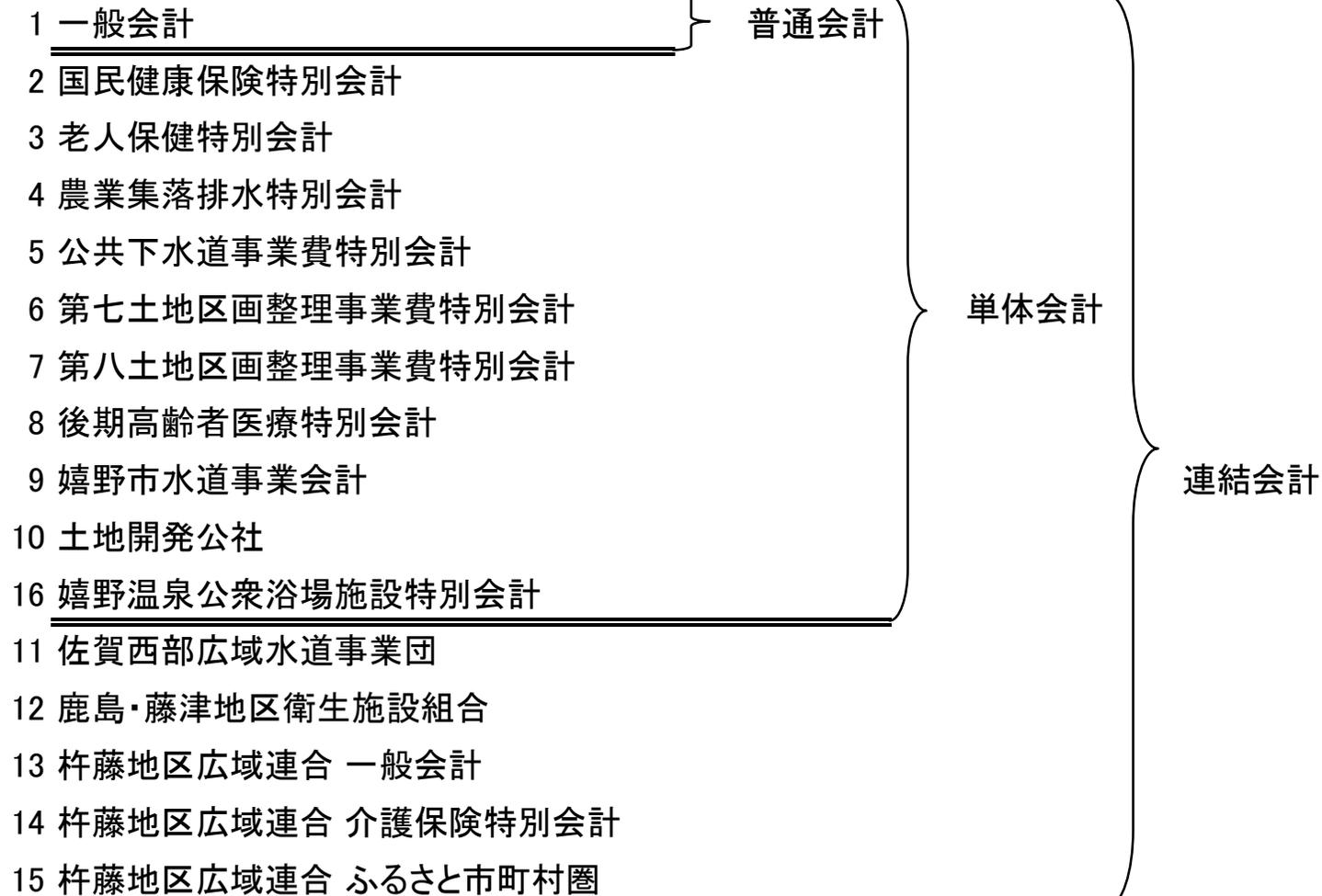


平成22年度 嬉野市財務諸表

総務省基準モデルによる作成

会計区分



新公会計財務諸表のご説明

普通会計 平成22年度

単位(千円)

貸借対照表			
資産の部		負債の部	
	金額		金額
1. 公共資産		1. 固定負債	
(1) 事業用資産	11,348,071	(1) 地方債	8,052,613
(2) インフラ資産	23,445,220	(2) 退職手当引当金	2,730,142
		(3) その他	0
2. 投資等		2. 流動負債	
(1) 投資及び出資金	1,723,870	(1) 翌年度償還予定地方債	856,711
(2) 貸付金	116,370	(2) その他	92,069
(3) 基金等	5,009,418		
3. 流動資産		負債合計	11,731,535
(1) 資金	537,772	純資産の部	
(2) 未収金	743,644		
(3) 貸倒引当金	-27,855	純資産合計	31,164,975
資産合計	42,896,510	負債及び純資産合計	42,896,510

純資産変動計算書	
	金額
期首純資産残高	30,495,655
純経常行政費用	-9,513,728
その他の減少	-347,102
財源調達	
地方税	2,911,758
社会保険料	0
移転収入	7,549,396
その他	0
資産評価替・無償受入等	68,997
その他	0
期末純資産残高	31,164,975

行政コスト計算書	
	金額
経常費用	10,248,955
1. 人にかかるコスト	
(1) 人件費	1,884,910
(2) 退職手当引当金繰入等	-123,000
2. 物にかかるコスト	
(1) 物件費・経費	2,457,134
(2) 減価償却費	507,617
(3) 維持補修費	163,451
3. 移転支的コスト	
(1) 他会計への支出	1,027,640
(2) 社会保障給付	1,833,472
(3) 補助金等	2,298,609
4. その他のコスト	
(1) 公債費(利払)等	152,636
(2) その他の業務関連費用等	46,484
経常収益	
使用料・手数料等	735,226
純経常行政コスト	
(経常費用 - 経常収益)	9,513,728

(1) 赤線
純資産の増減を表します。
・緑線は減った純資産
・財源調達は入った純資産
・その他は資産の目減り分

(2) 青線
資金の増減を表します。
(現在の決算書と同じ)

赤青が集まって
貸借対照表を作ります。

資金収支計算書	
	金額
1. 経常的収支	1,330,175
2. 公共資産整備収支	-1,363,108
3. 投資・財務的収支	-24,381
当期収支	-57,314
期首資金残高	595,086
期末資金残高	537,772
(基礎的財政収支)	
収入総額	12,370,613
支出総額	-12,427,927
地方債等発行額	-984,966
地方債等元利償還額	1,009,347
その他財務的収入	0
減債基金等増減	926,482
基礎的財政収支	893,549

※表示金額は千円単位となっており、四捨五入のため合計金額に齟齬が生じます。

貸借対照表

◆ 貸借対照表、市の財政状況を一目でわかるようにしたものです。

◆ 左側は、市の持つ資産で全体で 429 億円余り(住民1人当たり約 148万円) 右側はそれがどうしてできたのかを表しています。
429億円のうち、約 312 億円は明治時代以来、住民が営々とつくりあげてきたものであり、残りの約 117 億円は借入金やその他の資金でできています。
純資産比率(純資産/総資産)は、 72.7% で全国水準(70%) を上回っています。

◆ その資産の中身を見ると、資産のうちインフラ資産は、道路など、経済的取引には馴染まない資産なので、財政上の判断をするときは、無価値として考えるべきかもしれません。仮に無価値と考えて実質純資産比率を計算すると 39.7% となります。

◆ 公債については 89 億円、住民一人当たり約 307 千円の借金を持っていることとなります。

貸借対照表		貸借対照表	
資産の部	金額(千円)	負債の部	金額(千円)
1.公共資産		1.固定負債	
(1)事業用資産	11,348,071	(1)地方債	8,052,613
(2)インフラ資産	23,445,220	(2)退職手当引当金	2,730,142
		(3)その他	0
2.投資等		2.流動負債	
(1)投資及び出資金	1,723,870	(1)翌年度償還予定地方債	856,711
(2)貸付金	116,370	(2)その他	92,069
(3)基金等	5,009,418		
3.流動資産		負債合計	11,731,535
(1)資金	537,772	純資産の部	
(2)未収金	743,644		
(3)貸倒引当金	-27,855	純資産合計	31,164,975
資産合計	42,896,510	負債及び純資産合計	42,896,510

現金化の容易な資産

72.7%は正味資産

庁舎、学校、会館など
道路、河川など売却不能の資産

行政コスト計算書

- ◆ 行政コスト計算書は、企業の損益計算書にあたるもので、貸借対照表はストックの財政状態を表すものとすれば、これからの3つの財務諸表はフローの財政状態を表しています。
- ◆ 人にかかるコストのうち、人件費は市の職員給与、議員報酬、福利厚生などの他、臨時職員の給料や種々の講習会の講師謝礼も含んでいます。
この人件費の負担は住民1人当たり約 6.5 万円になります。
- ◆ 物にかかるコストのうち、物件費・経費は、人件費以外すべての業務費用です。
「(2)減価償却費」と「(3)維持補修費」は、設備に関する費用です。減価償却費は設備が劣化してそのうち使えなくなるので、その時の更新費用を予め引き当てておこうということですが、簡単にいえば、設備の使用料と考えてください。
事業用資産に関する減価償却費のみをここで計上し、インフラ資産のものは次の純資産変動計算書でその他の減少(直接資本減耗)として計上されます。
「(3)維持補修費」は、設備が目的とした機能を果たしていけるように行った修繕の費用です。
- ◆ 移転支出的なコストとは、それで直接サービスを行う費用でなく、市を通じていろいろなところへ移転した金額です。また、(1)は単体会計内で相殺処理しております。(2)の社会保障給付は、非常に大きな負担となっております。(3)の補助金等は住民の皆様のさまざまな仕事への補助となるものです。ですからこの3つは行政コストからはずして考えるべきかも知れません。
- ◆ 公債費は、地方債の利子です。これは支出全体の 1.5% ですから、無視できるものではありません。今の金利の状態でもこれですから、経済状況が変われば大変なことになります。
- ◆ すべての行政コストから、直接の受益者が負担する額、使用料、手数料を引いたものが、純粹の行政コストです。このコストは当然税金などでカバーさせねばなりません。
これが次の純資産変動計算書で表されます。

行政コスト計算書		金額(千円)
経常費用		10,248,955
1.人にかかるコスト		
(1)人件費		1,884,910
(2)退職手当引当金繰入等		-123,000
2.物にかかるコスト		
(1)物件費・経費		2,457,134
(2)減価償却費		507,617
(3)維持補修費		163,451
3.移転支出的なコスト		
(1)他会計への支出		1,027,640
(2)社会保障給付		1,833,472
(3)補助金等		2,298,609
4.その他のコスト		
(1)公債費(利払)		152,636
(2)その他の業務関連費用等		46,484
経常収益		
使用料・手数料等		735,226
純経常行政コスト (経常費用 - 経常収益)		9,513,728

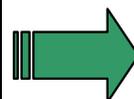
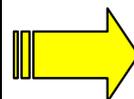
狭義の行政費用

補助金等移転支出と
その他の移転支出の合計

社会保障関連費用

純資産変動計算書

- ◆ 純資産変動計算書は、財政状態のフローを純資産の変動の角度から見たものです。
- ◆ 純資産を減少させるものは、まず先程計算した純経常行政コスト(これは、業務費用+引当金繰入額からなっています)と、「その他の減少」に計上されているインフラ資産の減価償却費(目減り分)です。これら全体を(A)とします。
- ◆ 純資産の増加分は、税収や国や県からの種々の補助金です。その他寄付金や他会計からの収益金もあります。これを(B)とします。
- ◆ このどちらが多いかで、次世代へ「負担額」を先送りしたのか、「余剰額」を引き継いだのかということになります。(A)が多ければ、当然「負担額」を先送りしたのであり、(B)が多ければ、「余剰額」を引き継いだことになります。実際に使った費用と設備の劣化費、必要な引当額を当世代が払うものと考えたら、最低必要な税額の見当がつきます。
- ◆ 市の平成22年度は、差引 669,320 千円の純資産の増加となっています。



純資産変動計算書		金額(千円)
期首純資産残高		30,495,655
純経常行政費用	} (A)	-9,513,728
その他の減少		-347,102
財源調達	} (B)	
地方税		2,911,758
社会保険料		0
移転収入		7,549,396
その他		0
資産評価替・無償受入等		68,997
その他		0
期末純資産残高		31,164,975

この差額 **669,320 千円**が、今期次世代へ引き継いだ余剰額です。

資金収支計算書

- ◆これは、今までに作成してきた決算書と同じ内容です。すなわち、現金(資金)の出入りがどのようになっているかです。本年度末残高は、昨年度末残高より、-57,314 千円の減少となっております。
- ◆経常的収支は、資産の形成に関係がなく直接純資産の増大・減少をもたらす資金の収支を表します。費用として処理される人件費や消耗品費のような物件費・経費の支出と、市に入ってきた資金での収入の関係です。ですから、行政コストや純資産変動計算書では支出と考えられた資産の目減り分(減価償却費や直接資本減耗)は、お金が出て行っていないので、その分少なく、大抵プラスとなります。
- ◆しかし、その残った分は資産の目減り分を補充するに等しい資産の取得に充てられています。これが公共資産整備収支(資本的収支)のマイナス分になっています。
- ◆財務的収支は、主として公債の元利償還支出と新しい公債の発行による収入の差額です。ですから、ここは大きなマイナスになった方がよいのです。

資金収支計算書

	金額(千円)
1.経常的収支	1,330,175
2.公共資産整備収支(資本的収支)	-1,363,108
3.財務的収支	-24,381
当期収支	-57,314
期首資金残高	595,086
期末資金残高	537,772
(基礎的財政収支)	
収入総額	12,370,613
支出総額	-12,427,927
地方債発行額	-984,966
地方債元利償還額	1,009,347
その他財務的収入	0
減債基金等増減	926,482
基礎的財政収支	893,549

新公会計財務諸表のご説明

単体会計 平成22年度

単位(千円)

貸借対照表			
資産の部		負債の部	
	金額		金額
1.公共資産		1.固定負債	
(1)事業用資産	12,990,149	(1)地方債	17,405,603
(2)インフラ資産	34,356,984	(2)退職手当引当金	2,730,142
(3)繰延資産	0	(3)その他	0
2.投資等		2.流動負債	
(1)投資及び出資金	1,825,820	(1)翌年度償還予定地方債	1,428,082
(2)貸付金	116,370	(2)その他	181,471
(3)基金等	5,009,477		
3.流動資産		負債合計	21,745,298
(1)資金	1,344,130	純資産の部	
(2)未収金	1,109,992	純資産合計	34,939,489
(3)貸倒引当金	-68,136		
資産合計	56,684,787	負債及び純資産合計	56,684,787

行政コスト計算書	
経常費用	
	金額
1.人にかかるコスト	
(1)人件費	2,097,045
(2)退職手当引当金繰入等	-123,000
2.物にかかるコスト	
(1)物件費・経費	2,904,523
(2)減価償却費	546,001
(3)維持補修費	345,289
3.移転支出的なコスト	
(1)他会計への支出	0
(2)社会保障給付	1,833,472
(3)補助金等	6,221,186
(4)その他	26,475
4.その他のコスト	
(1)公債費(利払)等	348,024
(2)その他の業務関連費用等	104,873
経常収益	
使用料・手数料等	1,554,360
細経常行政コスト	
(経常費用 - 経常収益)	12,749,527

(1)赤線
純資産の増減を表します。
・緑線は減った純資産
・財源調達に入った純資産
・その他は資産の目減り分

(2)青線
資金の増減を表します。
(現在の決算書と同じ)

赤青が集まって
貸借対照表を作ります。

純資産変動計算書	
	金額
期首純資産残高	33,378,988
純経常行政費用	-12,749,527
その他の減少	-634,008
財源調達	
地方税	2,911,758
社会保険料	846,655
移転収入	11,116,627
その他	0
資産評価替・無償受入等	68,996
その他	0
期末純資産残高	34,939,489

資金収支計算書	
	金額
1.経常的収支	2,648,374
2.公共資産整備収支	-2,573,520
3.投資・財務的収支	96,974
当期収支	171,828
期首資金残高	1,172,303
期末資金残高	1,344,130
(基礎的財政収支)	
収入総額	18,470,538
支出総額	-18,298,711
地方債等発行額	-1,730,826
地方債等元利償還額	1,737,778
その他財務的収入	-103,925
減債基金等増減	816,979
基礎的財政収支	891,833

※表示金額は千円単位となっており、四捨五入のため合計金額に齟齬が生じます。

新公会計財務諸表のご説明

連結会計 平成22年度

単位(千円)

貸借対照表			
資産の部		負債の部	
	金額		金額
1.公共資産		1.固定負債	
(1)事業用資産	13,789,865	(1)地方債	18,460,973
(2)インフラ資産	38,246,298	(2)退職手当引当金	3,099,188
(3)繰延資産	0	(3)その他	0
2.投資等		2.流動負債	
(1)投資及び出資金	2,149,333	(1)翌年度償還予定地方債	1,513,868
(2)貸付金	116,944	(2)その他	206,111
(3)基金等	5,552,789		
3.流動資産		負債合計	23,280,141
(1)資金	1,652,818	純資産の部	
(2)未収金	1,132,584		
(3)貸倒引当金	-70,001	純資産合計	39,290,489
資産合計	62,570,630	負債及び純資産合計	62,570,630

純資産変動計算書	
	金額
期首純資産残高	37,737,109
純経常行政費用	-13,743,194
その他の減少	-734,888
財源調達	
地方税	2,911,758
社会保険料	1,203,551
移転収入	11,867,899
その他	0
資産評価替・無償受入等	48,254
その他	0
期末純資産残高	39,290,489

行政コスト計算書	
	金額
経常費用	16,397,286
1.人にかかるコスト	
(1)人件費	2,511,110
(2)退職手当引当金繰入等	-123,000
2.物にかかるコスト	
(1)物件費・経費	3,157,859
(2)減価償却費	583,238
(3)維持補修費	423,704
3.移転支出的なコスト	
(1)他会計への支出	0
(2)社会保障給付	1,833,472
(3)補助金等	7,482,333
(4)その他	26,738
4.その他のコスト	
(1)公債費(利払)等	377,644
(2)その他の業務関連費用等	124,186
経常収益	
使用料・手数料等	2,654,092
純経常行政コスト	
(経常費用 - 経常収益)	13,743,194

(1)赤線
純資産の増減を表します。
・緑線は減った純資産
・財源調達は入った純資産
・その他は資産の目減り分

(2)青線
資金の増減を表します。
(現在の決算書と同じ)

赤青がもとに集まって
貸借対照表を作ります。

資金収支計算書	
	金額
1.経常的収支	2,813,665
2.公共資産整備収支	-2,625,699
3.投資・財務的収支	-68,108
当期収支	119,858
期首資金残高	1,532,960
期末資金残高	1,652,818
(基礎的財政収支)	
収入総額	20,740,368
支出総額	-20,620,509
地方債等発行額	-1,742,398
地方債等元利償還額	1,907,526
その他財務的収入	-97,019
減債基金等増減	830,509
基礎的財政収支	1,018,477

※表示金額は千円単位となっており、四捨五入のため合計金額に齟齬が生じます。